老いの入り舞

お昌（しょう）さん

田中清士

青山ライフ出版

老いの入舞（いりまい）

入舞転じて晩年に最後の一花を咲かせること

入舞（入綾に同じ）

舞楽で舞終了後の退出方法

花鏡（世阿弥著の能楽書）の中に老いの入舞を仕損ずるなりとある

広辞苑より

目次

群れない男……7
誘拐事件……16
性格起因……20
Y夫人……23
仏壇事件……26
怪電話……31
緊急通報……34
突然の来訪……38
女跳人……40

生き死にレース……52
がん発覚……55
レース中止……57
お見舞い……60
転院……67
転院後の電話……69
十七日～臨終……73
もう一つの訃報……75
出棺前日・献体……78
出棺・収骨……80
通夜……83
葬儀告別式……85

納骨……88
終章（入り舞）……92

群れない男

とにかく群れることが嫌いな男であった。記者仲間は彼の事をおしょうさんと呼び古手の刑事達もそう呼んだ。昭和四十三年六月、社内研修が終わって直ぐに配属された青森県の警察記者クラブで私は暫くの間、彼の事をお寺の息子とばかり思っていた。媚を売ることはしないがさりとて傲岸不遜とは違うぬくもりの様な包容力を感じたので私だけが勝手にそう思ったのかもしれない。名前は昌（しょう）と一字で書く。ある時、意味を尋ねると

「我（わ）で調べろじゃあ」

と津軽弁でにべもなかった。後日、辞書を引くと栄える、盛んの他にまれに乱れるの意味もあると分かり私は一人、ほくそ笑んで合点した。

それから六年間、九州育ちの私は雪国津軽にどっぷり浸かって独身生活を謳歌した。暑がり

の寒がりで特に冬の間は帽子から手袋に至るまで重装備だった私と違ってお昌さんは一年の大半を白っぽいトレンチコートで過ごした。しかもそれはかなり重い。テーブルの上に放り投げるとどさりと音がした。

「英国製で防水仕立てのオールコットンだはんでの（だからな）」

お昌さん特有の照れ隠しとちょっこしの一流自慢でもあったのだ。

群れない男が一番神経過敏になる季節、それは八月初旬のねぶたの期間中だった。お昌さんは何故かねぶたの衣装を着た事は無い。津軽のねぶた絵の武将のごとく武骨な顔立ちだし、悪くはないと思うんだが……。知人を案内する以外はねぶた道に出ることは先ず無かった。ねぶた囃し（ばやし）が遠くに聞こえる裏通りの居酒屋でビールかウィスキーのストレートを一人静かに飲むのが常だった。

私は彼とは逆に毎年跳ねた。しかも期間中はメインの三日間と最終日の四日連続、毎日である。自分でもあきれる程熱中した。

ねぶたの衣装は正装であるという警察署長の言を真に受けてある時は交通事故の現場にも直行して取材もした。同じ放送業界のライバル、民放局のお昌さんも十六ミリカメラ片手に当然

現着していたが私とは目を合わさなかった。恐らく強い侮蔑の眼差しで私を見ていたに違いない。

ねぶたが終われば津軽は翌日から秋風が吹く。お昌さんの誕生日が八月八日なのも彼のねぶた嫌いの要因の一つかも知れない。その日の注目度は決して高くはないだろう。空もすっかり秋の雲で冬は遠くない。

そんなある日、地元記者だった人の未亡人が経営していて仲間うちでは第二記者クラブと呼んでいた居酒屋に各社の若手記者が集まっていた。

午前0時近くになって座はスポーツ談義となった。お昌さんは高校野球の応援団の一員として甲子園にも出場している。アルプススタンドを前にして全身をエビのように反り返して応援したという。私も一応私立大学体育会の出身であり午後の授業は四年間丸々、スティックを持ちながらグラウンドで白球を追いかける事で費やした。酒席はこの二つが酒の肴となってかなり盛り上がりを見せ既に全員が酔っていた。

するとお昌さんがいきなり私に向かって

「お前（めえ）そったら（そんなに）走り自慢するなら今から空港まで走れっか」

とけしかけるように聞いて来た。こちらも引くに引けず
「ああ、走れるさ」
と応じた。すると周りは
「やめろやめろ」
と止めに入った。中には
「酔っ払いが空港まで走るなんて危険すぎるよ」
と言う者まで現れた。居酒屋から空港まではどれ位離れていたのだろう。皆も正確な距離は知らなかったがタクシーの運転手が大喜びする距離であることは確かだった。しかし私は
「お昌さん、何を賭けるんだい？　只じゃ嫌だよ」
と言ったら
「何でも言いせえ」
とお昌さん。
そうなるともう後には引けない。
「そんならこの店の俺のツケを全部払ってくれ」
お昌さんもそれに応じて頷いた。